帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

絵巻の中の橋

藤原良章

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．橋の類型
(1)＜常識的＞な橋
(2)今はあまり見かけない橋
Ⅲ．板橋考
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

本稿で私に与えられたテーマは「中世考古学への提言－絵画資料から」である。最初からいいわけじみてしまうし、別に自慢しているわけでもないにしろ、私は考古学を学んだこともなければ発掘をしたこともない。たしかに現場を訪れることもあるが、それはあくまで説明を受けるだけの話で、こちらから何か発見したり発言したりするわけでもない。まして、私は美術史の専門家でもない。あくまで文献がベースであり、時たま絵画を史料として使ってみているにすぎない。考古と絵画。いずれにしても素人というほかはないような人間が、どんなことにしろ、どうして考古学への＜提言＞ができるというのだろうか。

その感は、最近刊行された河野眞知郎氏の著書『中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都』[1]に接したとき、ますます増幅される。もちろん専門の中世考古学を中心としながら、民俗学や文化人類学、さらには絵画資料や文献史料まで周到におさえた上での叙述を見るならば、あえて私のようなものが考古学へ＜提言＞することなど到底不可能であることを実感させられてしまう。文献史の立場から藤木久志氏や松尾剛次氏が＜その後の鎌倉＞について、鎌倉の祇園会の様子をとおして室町時代にも鎌倉には「町」がいくつかあり、都市的な色彩をとどめていたと論じた[2]のに対して、

> たしかにそれは事実としても、そこに想定される町衆の人口は、せいぜい数千人のオーダーであってかつての数万とはくらぶべくもない。（中略）鎌倉の人口の減少の理由を考えることが今後の大きな課題であろう。

と指摘したことも、それを象徴的に示しているのではないだろうか。

そんなことを考えながら躊躇していても、一度引き受けたものを断れるほどの度胸があるわけでもなかった。かといって＜提言＞など夢の彼方であることにかわりはない。ここは、そんな大言壮語はかなぐりすて、せめて絵画と考古とをつなぐ＜橋渡し役＞程度にでもなれればという意味で、橋をテーマとしてみたい。

かつて折口信夫が柱に関して、それが神が降りてくるもっとも清浄な地域の表示ともなり、降りてくる道筋でもあったことを指摘した上で、柱の「ハシ(橋)」が、川の両岸を水平につなぐ機能をもっていたとすれば、柱は垂直に天と地をつなぐハシであったことにふれたように、橋は、川などによって本来隔てられた空間を接続させるという＜場の秩序＞に大きな変更を与えるものであり、単に通行の手段というだけでなく、より深い意味をもって捉えられていた。それ故であろうか、架橋も、行政というよりはむしろ僧侶といった宗教家にゆだねられることが多かった。著名なところでは、道昭・行基・重源・忍性などといった、それこそ仏教史上忘れることのできない人名があげられよう。そして多くの場合勧進によって架橋が行われたことも、架橋に対する喜捨が相当の功徳になるものと考えられていたからに他ならないだろう。

例えば、『太平記』巻二七「田楽事付長講見物事」は、貞和五年に大々的にとりおこなわれたいわゆる＜桟敷崩れの田楽＞のありさまを伝えている。四条河原に桟敷をもうけて行われたこの勧進田楽には、摂政二条良基や将軍足利尊氏をはじめとして、「卿相雲客諸家の侍、神社寺堂の神官僧侶に至る迄」が見物に訪れ、そのあまりの熱狂ぶりにたえかね、上下二四九間の桟敷が将棋倒しのようにどっと崩れ観客に多数の死傷者がでるほどのイベントであったが、その勧進は、四条橋を架橋する費用を集めるためのものだったのである。

その四条橋を描いたものとしては、『一遍聖絵』（第1図）があり、それはそれはりっぱな橋であった。この他にも、宇治橋や瀬田橋など著名な橋もあるが、しかし、中世の橋はそのような橋ばかりではなかった。

II．橋の類型

(1)＜常識的＞な橋

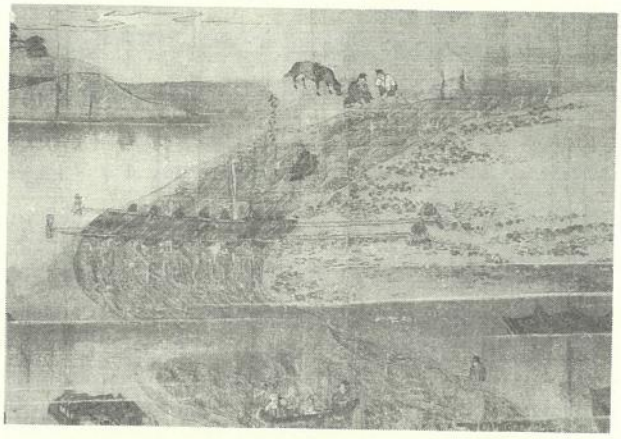
橋の類型を考える際、どうしても最初に除いておかなければならないものがある。それは、溝などにかけられたもので、板や石をおいただけのきわめて簡単な橋である。それぞれ板橋や石橋などと呼ばれたものであろうが、いずれも構造らしきものをもたないものであり、あえて橋の類型に入れる必要はないだろう。また、特殊なものとして、船を連結した船橋もある。図示したものは『一遍聖絵』で（第2図）、富士川にかけられた長大な船橋である。こうした船橋は構造こそ異なっているものの近世にも見られ（第3図）、あち

こちに残る「船橋」といった地名なども、こうした橋の存在を語るものであろう。ただ、あまり一般的なものではないので、これも一応のぞいて議論を進めよう。

第1図

(a) 大きな橋

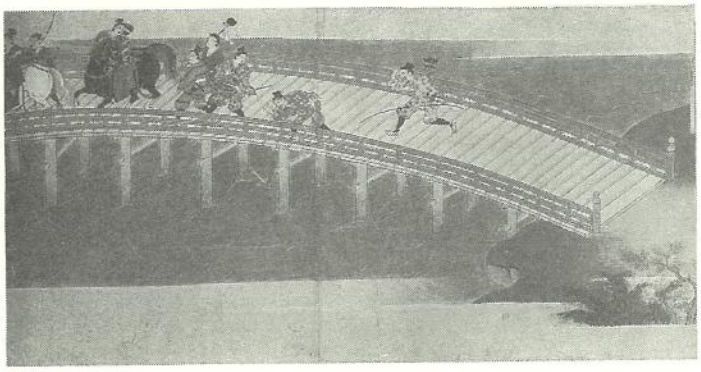
きわめて幼稚な類型化の概念である。いうまでもなく、四条橋や宇治橋といった世に知られた橋である。多くの橋脚、欄干、梁に直交してわたされた膨大な板材などによって構成される。我々がもっている橋のイメージにぴったりとくるものであり、多言は要しないであろう。例として第4図にあげたものは『石山寺縁起』に描かれた瀬田橋である。古代の東山道が、また長岡京遷都後は東海道が通る交通の要衝でもあり、あるいはたびたび合戦の戦場となるなど、まさに東と西を結んだ重要な橋であった。むろんのちにもふれるように絵巻ではデフォルメが行われるため、実際の規模ほどの印象では描かれていない感があるにしろ、少なくとも絵巻の中では相当な規模のものとしてとらえることができるものである。



第2図

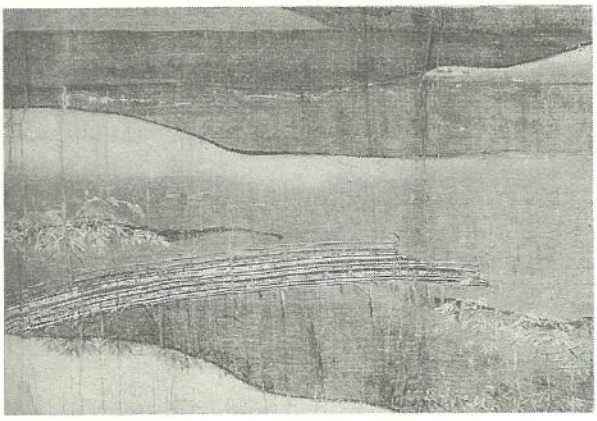
第3図

同じ段には宇治橋とおぼしきものもあり、また、『一遍聖絵』の京極四条釈迦堂の場面に描かれた四条橋などもりっぱな橋である。この四条橋の途中になにやら段差のようなもの



第4図

も見えるが、何だろうか。『一遍聖絵』にはこの他、巻五第三段に、常陸から鎌倉へと向かう道筋にやはり大きな橋が描き込まれているが（第5図）、この橋については不明である。



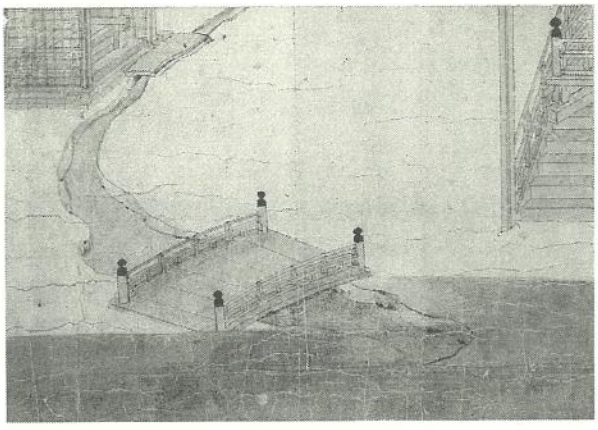
第5図

あるいは、『慕帰絵詞』に描かれた松島五大堂の橋、『芦引絵』の宇治橋、『道成寺縁起』の日高川に架かる橋など様々な橋をこの類型に入れることができよう。

いずれにしろ、こうしたタイプの橋はきわめて＜妥当＞な橋であり、特に問題はないだろう。

(b) 寺社邸宅、都市などの橋

これも形としては(a)の類型とさほど変わらない。太鼓橋か平橋かという相違はあるだろうが、それほど大きな問題ではないだろう。



第6図

いくつかを例示してみよう。第6図は『天狗草紙』延暦寺の巻に描かれた橋である。小規模ながら、流れに平行した六枚の板を並べ、欄干・宝珠などの装飾もりっぱな橋である。

第7図は、『一遍聖絵』の三島大社の光景である。あくまで例ではあるが、こうした平橋と太鼓橋の組み合わせはよく見られるものであり、このほか、『法然上人絵伝』に何度か描かれた九条兼実邸である月輪殿、法住寺御所などにこのタイ

第７図

第８図

第９図

第10図

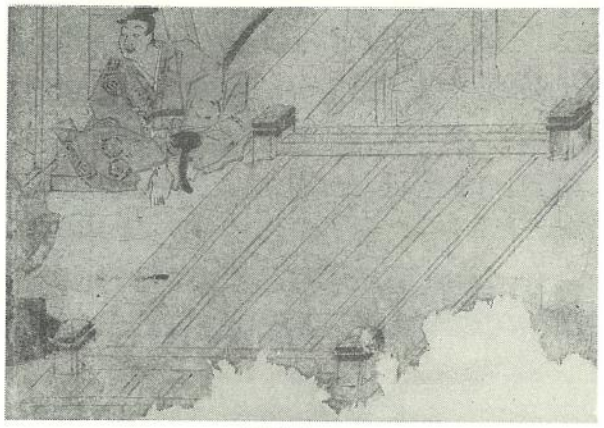
プの橋があり、寺社や邸宅内にはよくあったパターンであろう。復元された金沢称名寺の橋もこの中に入れることができよう。

これらとは構造が異なったパターンもある。第８図は『年中行事絵巻』の祇園御霊会における御輿渡御のシーンであるが、やはり流れに平行した板を十二枚並べているが、欄干とおぼしきものがかなり低く、宝珠のようなものも見えないという特徴を持っている。なお、この橋は異様に幅が狭いようにも見えるが、これは絵巻のデフォルメである可能性も高い。これときわめて似たものは、『一遍聖絵』四条京極釈迦堂の場面にも見ることができる（第９図）。これは京極大路を流れる中川に架けられた橋である。この川は現寺町通りにほぼそっているものではあるが、今は暗渠化されているためもあり、その規模などについては未詳である。しかし、この絵に見えるほど狭い川だったとはとうてい思われず（この絵で

は、橋を渡っている人物の歩幅程度しかない)、これはやはり絵巻のデフォルメとしてとらえるべきであろう。いずれにしても、流れに平行した板を並べ、比較的低めの欄干をたてるといったパターンは『年中行事絵巻』の橋と変わらない。そして若干相違はあるものの、『一遍聖絵』に描かれた武士の館の門前に架けられた橋もこれに似たタイプである。第10図は筑前国の武士の館であるが、反りがあまり感じられないこと、欄干の両端にある親柱が以上のものにくらべると若干立派な印象を受けること（角柱である)、といった違いを指摘できるとはいえ、基本的なパターンとしては同一のものとしてとらえられるであろう。

とすると、これらのものは邸宅の入り口にある橋のパターンとして把握することもできるようである。豪華さや規模では程度の差こそあれ、第11図に示した安達泰盛邸（？）門前の橋(『蒙古襲来絵詞』)、第12図の菅原是善邸門前の橋(『北野天神縁起』) をはじめとして、いちいち図示することはできないが、主に都市の道筋や邸宅門前の橋として、こうしたパターンはきわめて一般的なものだったらしい。

以上、街道筋などで著名な橋、あるいは、都市や近郊などの邸宅内や門前、道に架けられた橋のパターンに注目してみた。規模などの点では様々ではあるが、いずれにしても流れに平行した板を何枚も並べ、欄干などをもった橋が描かれており、我々にももっとも橋らしいものとして見えるパターンであった。



第11図

第12図

(2)今はあまり見かけない橋

これから注目していきたいのは、(a)の大きな橋でもなければ(b)の都市や邸宅内などに見られる橋でもない。あくまで名の知れぬ人々も歩いたであろう都市や街道の橋である。もちろん、

宇治橋や瀬田橋も人々が歩いた橋であることはいうまでもなく、例えば『石山寺縁起』では、「東国の人」が公家に訴訟を起こし、ようやくかちとった院宣を瀬田橋で落としてしまったという著名な一説をのせているが、その落とした人物は「東国の人」の下人であり、院宣を落とした光景に描かれたりっぱな瀬田橋に続いて、魚の腹から院宣を取り出す下人の姿を、宇治橋を遠景として描き出している。『石山寺縁起』のこの段は橋尽くしの感もあり、下人をはじめとして多くの人々が行き交ったであろう橋を描いていることも事実ではある。しかしここでは、名も知れぬ橋にこそ注目してみたい。

そうした観点にたったときもっとも雄弁な絵巻もやはり『聖絵』であった。いうまでもなく一遍はその生涯を旅に暮らし、その事績を描いた絵巻も、それこそ街道筋や都市、市、武家館など、様々なシーンが展開されているからであり、他の絵巻を圧倒している。

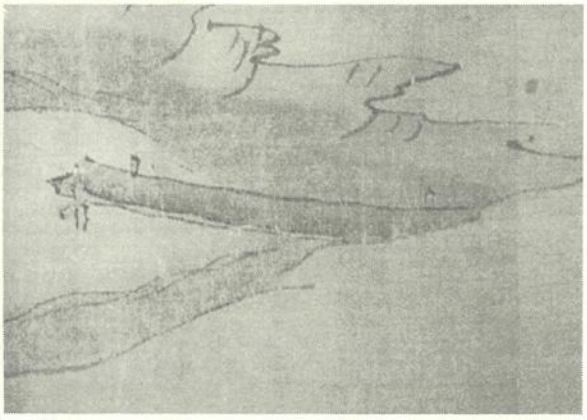
その『一遍聖絵』の中で、特徴的であり、またもっとも事例の多い橋が、板を流れに交差するように渡した、いわゆる板橋の一群であった。

(a) 板　橋

至って単純な橋ではあるものの、単に板を置いただけの橋にくらべれば、構造らしいものを伴っていることも事実である。第13図は『法然上人絵詞』に描かれた板橋であるが、こちらは何の構造もなく板を渡しただけの状態で描かれている。ちなみにこれは熊谷直実改め蓮生房の往生を衆庶が見物に来る場面である。

これに対し、第14図は、『一遍聖絵』の軽部の段に描かれた橋である。たしかに板を渡していることでは同様ではあるが、その四隅に杭状のものが打ち込まれていることが見える。似たようなものとしては、同じ『一遍聖絵』下野国小野寺の段にも見ることができるし、その他類例は枚挙にいとまがないほどである。四隅の杭に横木をくくりつけるか、あるいは臍穴越しに

第13図



第14図

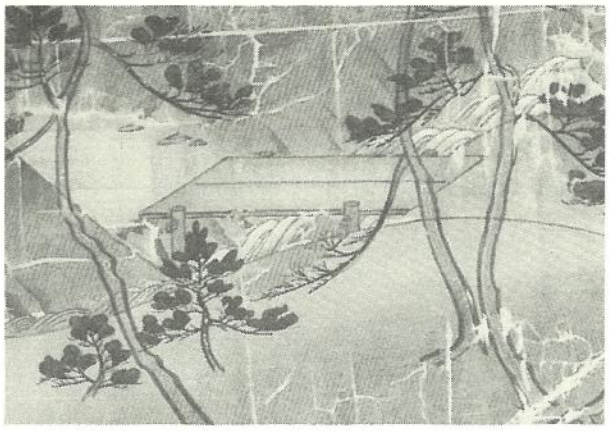
横木を入れるなどして板を固定している構造を窺うことができる。たしかに同じ板橋でも、ただ板を置いただけのものにくらべるならば、複雑な構造をもっていたともいえよう。むろん、瀬田のなどの橋にはくらぶべくもないが。

こうした橋のパターンには、板を何枚か並べた例もある。そうすれば幅が確保できたからであろう。二枚並べたものとしては、第15図の『春日権現験記絵』、四枚並べたものとしては、『平治物語絵巻』（第16図）に、やや複雑な構造を伴うこのパターンにしてはりっぱな橋も見ることができる。

(b) 複数段の板橋

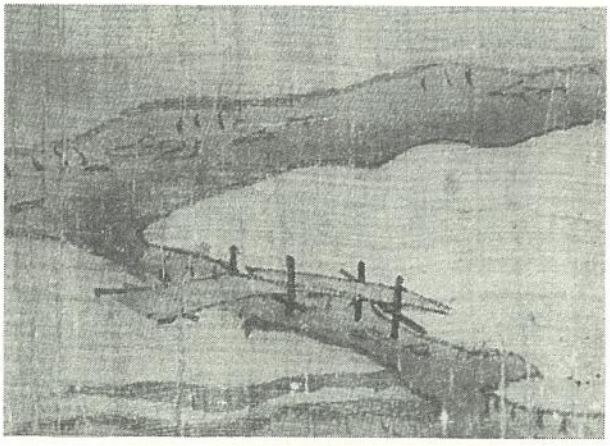
橋の幅を広くするなら、このように複数の板を並列に並べればことはすむのだが、むしろ幅の広い川に長めの橋を架けようとすれば、板は並列ではなく、直列に並ばなければならない。基本的には板橋を軸としながら、幅の広い川に架けられたもう一つのパターンであり、一枚、あるいは並列した複数枚の板を直列につなげたものがそれである。

第17図は『一遍聖絵』の播磨国書写山のシーンに見える二段に渡された一枚の橋である。左



第15図

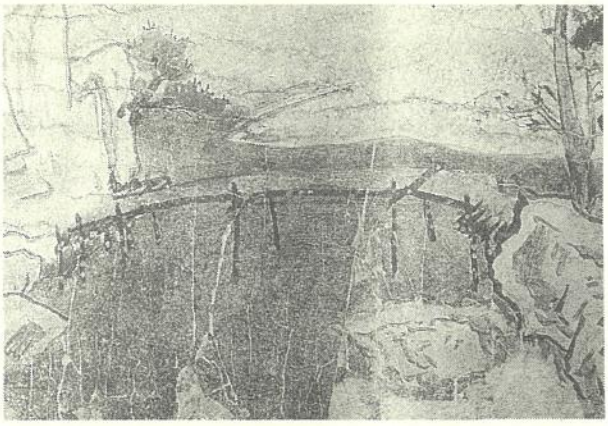
第16図



第17図

側があまり鮮明ではないが、右側の橋と継ぎの部分に杭と板を支える横木がはっきりと描かれている。いわばさきに見た板橋の応用例であり、こうすることによって橋の長さをかせいでいたようである。といってもこの絵では、あまり長い橋という印象を受けない。これは、絵巻のデフォルメにもよると考えられるが、次の賀茂川に架かった橋では、やはり相当長大な橋であることを確認できよう。

第18図



第19図

第18図は同じく『一遍聖絵』の市屋道場に見える、七条橋である。都市京都の中でさえ、このような板橋が三段つながれて渡されていたのである。賀茂川をイメージしながらこの橋を想像してみると、わたるとき相当にしなりそうな感じがするが、これは実際こうしたものが架けられていたのだろう。その下を筏が通っていることからも、その橋脚が相当の高さをもっていたことも想定していいのではないだろうか。なお、この場合の両端には固定するための杭や横木の類は見られない。それにしても、実に単純な板橋ではあるが、このように橋脚をもうけることによって、賀茂川のような広い川にも架けられていた橋のパターンであったことを確認しておきたい。

さらに何枚かかっているのかもよく分からないが、やはり長い板橋は、『稚児観音縁起』の中にも見ることができる（第19図）。『日本の絵巻』では、これを「小さな橋」としているが、どうして、絵師は相当幅のある川に架かった橋として表現したのだろう。

これの橋幅を広げ、複数の板橋を何段にもつなげたものとしては、『一遍聖絵』淀上野の踊り念仏のシーンに、三段に連ねられた二枚の板橋に典型的に表現されている（第20図）。以下こうした橋を３×２枚の板橋と表現していきたい。

以上、絵巻に現れた橋のすべてについて取り上げたわけではないにしろ、大まかな傾向

をつかむことはできたであろう。

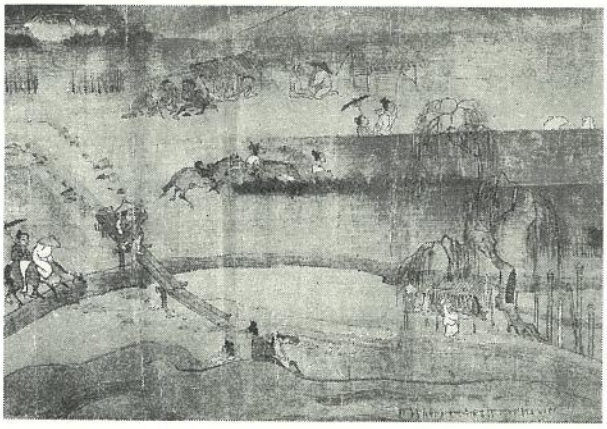
Ⅲ．板橋考

こうした橋を検討してみた場合でも驚嘆させられるのが、絵巻研究の大先達である『絵巻物による日本常民生活絵引』（以下『絵引』）である。様々な橋についてもすでに言及されており、こうしたテーマが、30年前にすでに議論の対象になっていたことには脱帽せざるを得ない。

にもかかわらず時間の関係の問題であろうか、若干の疑問も指摘することができる。それは『聖絵』の淀上野での念仏踊りを描いた部分の風景についてである。絵引ではまず画面の一番奥に描かれた橋に注目する（第20図）。そしてこの橋について次のような説明をのせている。

> 橋の様子からして、この街道が主要街道でないことを物語っている。何故なら、橋がいたって粗末だからで、欄干も何もなく流れの向こう岸と手まえに橋桁をたて、それに板二枚をならべてのせて流れをこえるようにし、さらに地面へ斜めに二枚ならべている。洪水のため本橋が流れたあとの仮橋とも見られるがこのような橋は今日もいたるところに見られるものであるから単なる仮橋とも思えない。板をついで渡しているものであるから、継橋ともよばれるものであろうが、重要な街道でなければ、このような橋でも事足りた。（91頁）

だが、この橋を子細に見るならば、これが三段に渡した二枚の板によって構成された、3×2枚の板橋であることは明らかである（なお私はこのような橋を見た記憶はないことを告白しておく）。それはともかく、この道が、「主要街道」ではないことを、橋の分析から指摘しているのである。ところが同じ道の別の部分（第21図）について絵引は、街道筋に井戸が見えることから、



第20図

> 街道の方は道ゆく人も多く、その人たちのためのいろいろの施設もなされており、ここに見えるような井戸の設けもその一つと思われる。（中略）旅人の渇きをいやすためにつくられたもので

あろう。（中略）『石山寺縁起』に見える逢坂の関の清水は石垣の間から樋をつたって流れ出ているが、やはり旅人のための飲料施設で、こうした設備は街道すじにはなくてはならぬものであった。（99頁）

この二つの説明は決して矛盾しているといった類のものではない。ただ同じ街道について、前者では橋が「粗末」だという理由で「主要な街道」ではないとし、後者では道ばたの井戸に注目してこれが街道筋には不可欠のものであったことを指摘している。むろん、後者においてもこれが「主要街道」であると指摘しているわけではない。しかし、両者の橋を比較してみるならば、前者が3×2枚の板橋であるのに対して、後者はもっとも単純な板一枚の板橋である。仮に橋だけを比較したみた場合、後者のほうが圧倒的に<粗末>だといえるのであり、前者はこれまで見てきたとおり、板を渡した板橋の中ではほとんど最大級の規模を誇りうる橋なのである。これをもって「主要な街道」であることを否定されては、この橋は面目丸つぶれといわざるをえない。様々な絵巻の中で、瀬田橋や宇治橋といったような1aの類型に属する橋がほとんど見られないのに対して、(2)の類型の板橋が街道の橋の大部分をしめることについてはすでにふれたとおりだからである。

そういえば、『絵引』は、常陸－鎌倉間の橋（第5図）についてもやや冷たいそぶりを示している。

この図に見るような田舎道にも立派な欄干のついた橋の架かっているものもあるのは街道すじのためだろうか。この橋は常陸（茨城県）にある。（中略）京都付近の橋のように堂々とした欄干もまた橋脚を持っていない。しかし一応欄干はついており、橋板もしかれている。橋はわずかだが上部に反っている。これは他の大きな木橋にも共通している。橋そのものは擬宝珠ももっておらず、また橋脚なども細く小さく街道筋の橋としては貧弱だといえるが、絵巻の中に見えた地方の橋の中では、技術的に高いものといえる。（94頁）

この橋を、京都付近の大きな橋と比較するのはやはり酷であろう。宇治橋や瀬田橋といった橋は、現在でいえば、いわば本四架橋や、今はやりのペイブリッジ、レインボーブリッジといった類であり、ほかに例を見ないほどの技術と規模を誇っていたものであった。特に瀬田橋は、近代にいたるまで瀬田の唐橋とも称された、いわば<観光>のスポットでもあったのである。『絵引』は、こうしたクラスが存在する街道を「主要街道」と想定しているようだが、これらはやはり特殊なものと考えなければならないだろう。例えば瀬田橋が、京都を発した街道が草津でいわゆる東海道と中山道（あるいは東山道）に分かれるまでは、この両方の道筋が重なっているといったような、いわば西と東を結ぶ街道のそれこそ大動脈中の大動脈であったこと、また、中世では別に五街道といった国家的な制度があったわけでもなく、特に地方に行けば様々な道が交錯していたことも考えあわせれば、その

ような立派な橋が連続してかかっていること自体あり得なかったのではないだろうか。

この橋を京都付近の立派な橋と比較して、街道筋の橋としては貧弱だととらえるよりは、『絵引』が「絵巻の中に見えた地方の橋の中では、技術的に高いものといえる」と指摘した事実認識こそ、重要な論点であると考える。

このように中世の橋をさして評価しない姿勢は、新城常三氏の執筆にかかる『日本史大事典』（平凡社）の「橋」の項にも見ることができる。

> 律令制度の衰退にともない、交通路は荒廃していった。中世には鎌倉幕府が鎌倉市内や京都との連絡路の東海道など、室町幕府が京都市内やその周辺などの直接支配地や重要街道に限って、橋の造替にかかわったにすぎない。（中略）実際はほとんど現地の人に委ねられた。そのため架橋技術の発達はあまり見られず、橋の整備も古代よりむしろ後退した。

と評価され、中世の旅人は、渡河施設の欠乏に難渋したと指摘されている。しかし、すでに見たとおり、絵巻に描かれた街道とおぼしき道には、<粗末>で、たいした技術を用いないものではあったかもしれないにせよ、ほとんどの場合、板橋が架けられており、川をじゃぶじゃぶと渡る姿は、特殊なものを除くとほとんどないのが事実なのである。

たしかに技術の進展という側面からすれば、こんな板橋などほとんど意味を持たないものであったかもしれない。そして、そうした技術の発達という観点から橋をとらえることも、必要なことではあろう。とはいえ、そうではなく、技術がどうであろうと、中世の旅人が歩いた道や橋を考えるという観点から考えれば、こうした板橋こそ彼らの旅を支えてくれた貴重な橋だったに違いない。この点について具体的に見ていこう。

まずは『絵引』が「主要な街道」ではないとした、『一遍聖絵』の画面を再検討してみよう（第20・21図）。

まず左端の方に例の3×2枚の板橋が見え、その上を子供を背負った女性がまさに渡っているところである。道は、その上で左に折れて続いているが、左から来た道の正面に、躍屋が設けられ、時宗が金鼓をたたきながら踊り念仏を行っている。周囲にはそれを見るために集まった二十余名の人物が描き込まれている。それだけの人が集まり

第21図

うる寺院があったことになるが、注目したいのはその参道の入り口とおぼしき付近に、数名の非人が仮屋をさして座っていることである。彼らが一遍の一行についてきた可能性がないわけではないが、この場面の前の洛西桂の道場、美作国一宮のあたりでも非人の姿を見ることができるので、これは一遍について来たものではなく、この地で生活していた一群と見るべきであろう。それは、丹波国穴生寺や但馬国久美の浜を描いた場面には非人が見られないことなどからも、そうとらえることは妥当である。とするならば、特に一遍一行が来ない場合にでも、彼らはそれなりの施行を期待できたことを示しているのであり、この寺院が、相当の人を集める能力を、自身が持っていたことをも示しているのである。むろん京都の市中ほどのものではないにしろ、かなりの人が通った街道に面した寺院であったことはまちがいないだろう。

さらに道を右に行ってみると、飲食ができるような店も見えるし、十本近くの卒塔婆がならんでいる。『絵引』でも、さきに見たようにこの道沿いにある井戸について旅人のための施設としてとらえているが、この飲食店らしきものも同様であろうし、卒塔婆についても『絵引』は「農道の方には道ばたに、ここに見るような井戸もなければ、供養の卒塔婆などもたっていない」としており、まさにこれが街道であったことを指摘しているのである。

さらに右に進むと、道は条里を思わせる水田の中を通るようになり、一枚の橋の上、およびその前方に、朸（おうご）の両端に桶を担いだ油売がみえる。その右には、例の井戸と、柄杓をもったことで旅の途中であることを象徴的に示した武士の主従も見える。

この場面には、この他にもいくすじかの道が描き込まれている。しかし、人が歩いているのはこの道のみであり、歩く人々や旅人のためのいろいろな施設を描き込むことによって、絵師は、この道がほかの道とは違う街道であることを強くアピールしているのである。

続いて、詞書に見える「よどのうへの」という地名に注目してみよう。上野は、現大阪府枚方市に比定することができる。もとは交野郡に属し、「粟倉寺」があったと考えられている。そして近世には、淀川に平行して京街道が設けられており、枚方もその宿の一つであった。これは京都と大坂を結ぶ東海道でもあり、大坂に向かう物資や人は淀川を下り、京に向かう人や物資で賑わった街道であった。この京街道自体は、豊臣秀吉による淀川左岸の文禄堤の構築によって成立したものであり、まさに主要な街道であった。[3)]

ひるがえって一遍の旅を見てみよう。『一遍聖絵』巻九によるならば、一遍一行は弘安九年冬のころ、石清水八幡宮に詣でて託宣を受け、ついで淀の上野で踊り念仏を行い、歳末には、四天王寺で別事念仏を行っているのである。そのルートは、淀川に沿って南下し、大坂にいたっているのであって、細かなルートはともかく、さきの場面に描かれた街道が、秀吉以前のいわば京街道を描いたものと考えることは決して不可能ではない。それ故にこ

そ、この街道には3×2枚の長い板橋も架かっていたのだ、と考えることもできるのであって、『絵引』のように、あえてこれを粗末な橋であるから主要な街道ではない、とする必然性はないだろう。

続いて、やはり『一遍聖絵』の中の有名な場面を取り上げよう。備前国福岡の市である。

備前国藤井の政所で、吉備津宮神主の子息の妻が一遍に帰依して出家した。それを知った子息は一遍を追いかけ、福岡の市で一遍に遭遇し、これに斬りかかろうとしたが、かえって一遍に帰依して本人も剃髪した、というストーリーである。すなわち、この場面には藤井の政所と福岡の市、といった二つの地点がおさめられているのである。まずは、福岡の市に注目していこう。

市の手前に一筋の川が流れている。福岡の市ということであれば、この川は吉井川であることはまちがいない。福岡の市自体、東西に走る山陽道と、南北に流れる吉井川の水運が交わる地点に設けられた、交通の要衝に位置する市であった。絵を見ると、吉井川に係留された二艘の船と、人を乗せて川を走る一艘の船が見られ、まさに水上交通が市と密接にかかわっていたことを示している（第22図）。

第22図

第23図

一方、藤井の政所の位置は特定されていない。平凡社『岡山県の地名』では、二カ所をその候補としてあげている。一つは、現岡山市西大寺一宮であり、これは福岡から10kmあまり南方に位置する。もう一つは、岡山市藤井であり、福岡の西10km弱の地点である。登場人物が吉備津宮の神主の子息であったことを見るならば、後者が妥当なところであろう。

仮にこれを前提とするとどうなるであろうか。

中世の山陽道は、例えば応

安四年（1371）、大宰府に向かう今川了俊の「道ゆきぶり」によれば、了俊は船坂峠（現備前市の東端）－香登（同西端近く）－福岡－三野渡（現岡山市）－辛川（同）－軽部川（現高梁川）などをとおって西に向かっている。了俊は、辛川に一泊し、翌朝吉備津宮に詣でているのである。そして、これらの線を結んだ場合、近世の山陽道とは異なるものの、きれいな東西道が浮かび上がり、福岡と三野渡のほぼ中間点に位置するのが藤井なのである。とすれば、藤井の政所を出発し、福岡の市に向かっている子息ら主従は、まさに、中世の山陽道をひた走り、吉井川を渡って市に到着したことになるすなわち、『一遍聖絵』に描かれた吉井川に架けられた二枚の橋こそ、主要な街道であった中世の山陽道に架けられた橋そのものを表現していたのである[4]（第23図）。

ただこうした解釈には無理もある。吉井川の流れが逆さまになってしまうからである。絵を見れば二艘の係留された船と、人を乗せて運航中の船が見える。係留された船の船尾が左に流されていること、右に向かう船の水夫が棹さしていることなどから見て、右が上流、左が下流となり、実際とは正反対である。藤井を西大寺一宮と仮定した場合ではこの問題はクリヤできるのではあるが、やはりその他の疑問がいくつかでてきてしまうのである。いずれにしても、<完璧>な解釈は成り立たない。

だが、絵巻は地図ではない。あくまでもイメージの産物である。例えば了俊が福岡について、「其日はふく岡につきぬ。家ども軒をならべて、民のかまどにぎはいつゝ、まことに名にしおいたり。」と書き遺したように、中世において福岡の地は、きわめて繁栄した場であり、また吉井川と山陽道が交わる市としても著名な場所であった。それ故、絵師は、水上交通の盛んだった吉井川らしき川を市の傍らに描き、そして山陽道の存在も橋によって表現した。これがもっとも妥当な解釈であろう。『一遍聖絵』に描かれた伴野の市ではあえて川を描いていないことも、参考にはなろう。

いずれにしても、絵師にとって山陽道の橋は、こんなものとしてイメージされていたことはまちがいないのではないだろうか。

もう一つ『一遍聖絵』から。弘安三年（1280）、一遍一行は白河の関をこえ、奥州江刺にある祖父河野通信の墓をたずねた。その墳墓の手前には、白河関からくると思われる道が連綿と続いている。商人の一行などの往来が描かれ、また詞書にも「漁人商客の路を

第24図

ともなふ、知音にあらざれどもかたらひをまじへ」とあり、まさに、人々が行き交った道が描かれているのである。これは奥大道、あるいはその脇往還であろう。そして、この道に架かっている橋も、例の板橋であった（第24図）。

現代の人間にとって、橋といえば(1)の類型を思い浮かべるであろうし、私もそうだった。しかし、改めて絵巻を繰ってみると、それは誤りだった。むしろそうした橋が少数派であり、板橋こそが各地を結ぶ重要な機能を担っていたのだった。ひるがえって、ベイブリッジクラスの瀬田橋などを例外とした場合、中世を旅した人々にとっても、橋といえば一般的に板橋を頭に浮かべたであろうことも、以上の点から明らかなのではないだろうか。

Ⅳ．おわりに

本文でもふれたとおり、従来、中世の架橋をはじめとした交通施設に対する評価は決して高いものとはいえず、いわば中央集権的律令国家の衰退から、交通施設の整備は後退し、近世幕藩国家という中央集権的ともいえる強力な政権のもと、あらためて五街道という形で交通網が整備された、というのが従来の通説であった。それらの間隙にあった中世は、交通網という面では、それこそ谷間の時代というイメージでとらえられてきたのである。そのためもあろう。本稿で取り上げた板橋などは、<粗末>なものとして見られ、それ故、主要街道ではないことを証明する手だてとしてさえ使われてきたのである。

しかし叙上のごとく、瀬田橋などを例外として、中世の街道に架けられた多くの橋は、このパターンの橋であった。それこそ、中世の旅人を支えてきた橋といっても過言ではあるまい。むしろ中世の街道を象徴する橋でもあったのである。そして、中世にはたぶんこんな橋が架かっていたらしい地点が、近世では渡し場になっている事例、あるいは、江戸幕府が大河に橋を架けさせなかった点などを含めてみるならば、中世という時代は、どんな<粗末>な橋であろうと、とにかく橋をわたそうとした時代であったともいえるかもしれない。それは、中世に生きた人々が持っていた橋に対する独特な観念や信仰を背景としていたものとも思われるが、あまりに与えられたテーマから離れるため、その点についてはあらためて論じてみたい。

以前私は、中世的社会が<都市的論理の拡散>といったことを一つの契機として成立したのではないか、などということを書いたことがある[5]。そうした<都市的な論理>を各地に伝えた媒介がこうした<粗末>な板橋であった、と考えると、こんな<粗末>な橋にも愛着がわいてくる。どこかで川岸などに、小さな杭を打ったあとがあったりしたら、是非とも拝見してみたいものである。

冒頭に示したごとく、およそ提言とはかけ離れたものになってしまったが、さしあたり

紙数をうめるという最低限の義務だけはかろうじて果たしたこととして、文字通りの拙稿を閉じたい。

（青山学院大学文学部）

註

1）『中世都市鎌倉 ― 遺跡が語る武士の都』、講談社選書メチエ、1995。

2）藤木「中世鎌倉の祇園会と町衆 ― どっこい鎌倉は生きていた」、『神奈川地域史研究会会誌』11、1993。松尾「鎌倉市仏教を見直す⑧ ― 鎌倉祇園会」、『春秋』 1993。

3）以下は平凡社『大阪府の地名』によった。

4）この点黒田日出男「市の光景」（同『姿としぐさの中世史』平凡社、1986）参照。

5）藤原「中世芸能の歴史的位置 ― 田楽を中心に」、網野善彦編『中世を考える 職人と芸能』吉川弘文館、1994。

［付記］ 成稿後、阿蘇品保夫氏の「中世における橋の諸相と架橋」（『熊本県立美術館研究紀要』7、1985年）に接することができた。橋の類型など、本稿でも取り上げた部分や、本稿ではいっさいふれなかった架橋技術についての言及があるなど、本来取り上げるべきものであった。ここにその不備をお詫びしたい。